

《論 文》

『キム』論

——ボーダーラインの誘惑

赤 岩 隆

【要旨】

ラドヤード・キプリングの小説『キム』を論じる場合、それを主人公の成長物語として読むことは、まったく自然である。ただし、その際結末についてどう考えるかこれまで多く問題にされてきた。本稿においてはそれを解決するのに、「ボーダーライン」という言葉をキー・ワードに据えながら、主人公がそれによりいかに誘惑されつつ成長してゆくか論じる。

1. はじめに

少年キムが何者なのかというのは、じつは問題にならないはずである。ほかでもない、第一章の冒頭数ページにその答えが書かれているからである。彼はなにより白人（アングロ・インディアン）である。しかしながら、

彼の膚は土地の者に負けないくらい黒く焼けていた。好んで土地の言葉を使い、母国語のほうが抑揚のない片言で、市場の少年たちとはまったく平等に交わった。¹

キムには両親がいない。父親はアイルランドのマヴェリック連隊の軍旗護衛下士官だったが、酒と阿片で身を持ち崩して死に、母親はそれより先にコレラで

*2005年9月27日受理、2006年1月12日掲載決定。

死んだ。その後はいかがわしい混血女の世話になった。「高地のフリーメーソンの孤児院」にも背をむけ、また、「怖い顔で身元や行状を尋問する白人や宣教師を避け」ながら暮らした。代わりに、

デリー門から外堀まで城壁で囲まれたラホールの素晴らしい街の隅々まで知っていた。ハルン・アル・ラシードですら夢にも思わなかった風変わりな生活を営む人たちと親しく交わり、彼自身アラビアン・ナイトさながらの奔放な生活を送っていた。²

街じゅうどこへいっても「みんなの友だち」というあだ名で通り、「幼いころより悪を知り尽くし」、托鉢僧とも親しく、そのおこぼれにも平気で与る。必要とあれば低級カーストの子どもの衣服に着替えて、

結婚式の行列に付いて廻ったり、ヒンドゥーの祭りに参加し大声を上げ、疲れきって明け方に帰宅する。食べ物が家にないこともしばしばだったが、そんなときにはふたたび外に舞い戻り、土地の知り合いに分けてもらうのだった。³

そのようにキムは白人でありながら白人ではない。白人と非白人、植民者と被植民者のあいだに厳然と存在する境界線を苦もなく侵犯し、それでいて誰からも咎められずに生きている。そうした無謀が許されるのは、なにより彼が孤児で、いまだ十三歳の少年だからだったが、そのまま彼が、インドの市場のアジア的な無秩序や混乱のなか、生涯をまっとうできたならどんなによかっただろう。しかしながら、それでは物語がはじまらない。市場の有象無象のなかから彼は選り出され、「自分は何者なのか」という問いを自ら発せざるを得ないような目に遭うことになる。『キム』とは、そうした罪もなく暮らす少年に、

アイデンティティの所在というきつい問題を突きつけ、それに対する答えを彼がどのように出したかを描く、一種の成長物語である。それだけいえば、いかにもヴィクトリア朝的と一蹴されそうだが、舞台はイギリスでもロンドンでもなく、大英帝国の最前線インドである。したがって、いくら名もない少年とはいえ、そこでのアイデンティティを問われるということは、多かれ少なかれ、由々しき問題を招来することになる。なぜなら、最前線とは、その背後に控える全体のもっともデリケートな部分が赤裸々にならざるを得ない場所だからである。それが証拠に、『キム』を論じる者は遅かれ早かれ、十九世紀後半のイギリス帝国主義という現実には逢着する。ラホールで無垢に暮らしていた少年を、彼が代表するには大きすぎる枠組みのなかへと引っ張り出し、その功罪を問うことにもなる。⁴ そうした重さの一端は当然作者自ら担ってくれるだろうが、主体たるキムのことを思えば、なんとも残酷な話には違いない。しかしながら、少年キムは、それに対してじつに善戦健闘してくれる。じっさい、そうした善戦健闘ぶりこそが、『キム』という作品の偉大さであり、いまだどの批評も完全には解明できずにいる作品の秘訣でもあるのだが、そのようすをこれからみてゆこうと思う。まずは、成長物語としての全体的な構図からである。

2. キムとは誰か

「あらゆるカーストを見分けられるキム」ではあったが、その彼ですら「みたことがないような男」にある日のこと出逢う。訊けば、チベットからきたラマだという。秘宝館（博物館）がみたいというから、その老人をなかまで連れてゆく。館長をしている白人とは知り合いである。ともに学識者である館長とラマはひと目で意気投合し、キムはそんなふたりの会話を盗み聞きする。解脱を可能にしてくれる聖なる河を探しにきたと、熱をこめて老人は語るが、それ

がどこにゆけばみつかるか博識の館長にも解らなかった。ふたりは贈り物を交換し合い別れるが、ところが、なにを思ったかキムは、「盗み聞きした話にすっかり興奮してしまい」、

すべての経験に照らしてみてもいままで出逢ったことのない人物だった。

もっとよく調べてみるつもりだった……そのラマは彼がみつけた宝物であり、なんとしても手に入れたと思った。⁵

そうした言葉どおり、少年は老人の面倒をなにくれとなくみてやる。休む場所を確保し、代わりに托鉢にも出てやる。理不尽にも老人は、目のまえに現れた少年を旅の途中で死んだ弟子の代わりに授かったものと見做し、少年もそうした立場を受け入れて、ベナレスまで道中をともにすることになる。

これが物語のはじまりである。だが、なにかと世離れしたラマが、見知らぬ少年を死んだ弟子の身代わりと考えるのはまだしも、なにゆえキムはその旅に同道することに決めるのか。うえをみるかぎりでは、少年らしい好奇心に従っただけのものともみえる。大袈裟にも、得体の知れないラマを「宝物」とまでいいきるところをみると、よほど暇をもてあましていたとも考えられるが、ベナレスまでの距離にしたところで、放浪癖のある彼にとっては大したものではなく、飽きれば即刻師弟関係を解消しラホールに戻ってくればよい、そう考えたのかもしれない。しかしながら、同時に彼は、彼の父親が遺した「緑野の赤牛」の予言をラマに披露する。これも、「人がある計画を持ち出すのをみて、少年らしく、負けずに自分の計画を口にした」⁶ だけのことかもしれない。あるいは、少年自らいうように、「だいいち、あんたみたいに、陽も暮れたというのに行きずりの人に本当のことをしゃべるような年寄りには、弟子が要るに決まっている」⁷ と考えたからだろうか。だとしたら、早くもこの時点で、すでに少年は老人に対してなんらかの愛情なり好意なりを抱いていたことになる

が、いずれにしろ、キムがラマに付いてゆくことに決めた真相は、一筋縄では説明できそうにない。これについては、のちにふたたび触れることにして、先を急ぐことにしよう。

しばしば指摘されることであるが、そのようにベナレスへとむかう老人と少年の姿は、あの有名なドン・キホーテとサンチョ・パンサのふたり組によく似ている。理想や夢の実現のことだけで頭がいっぱいになり、目先のことにはまったくうとい主人（師）と、それとは逆に、世間知には人一倍長けたはしこい従者（弟子）の関係である。これに対抗するように、ハックルベリー・フィンとトム・ソーヤーの名前がキムの先行者としてよく持ち出される。⁸ とりわけ前者の影響が強いとされるのだが、その真偽はともかく、重要なのは、そうした老人と少年のふたり旅が、ある意味ではとても充実したものだったということである。旅の目的は、聖なる河を見つけることだったが、ちょっとやそつとで果たせるような目的ではなかったから、不屈のラマの心中はともかく、実質としてはなきも同然の、体のよい移動の口実というのがせいぜいだった。それゆえ、ふたりの旅はピカレスクのそれとなるし幸せな旅ともなるのだが、けれども、そのままでは切りがない。したがって、そうした容易に実現しそうにない目的は脇に置き、それよりははるかに実現の可能性の高いキムの予言のほうを的中することになる。予言どおり、「緑野の赤牛」も「馬に乗った大佐」も現れるが、その結果キムはラマから切り離され、一人前のスパイに仕立て上げるべく学校へと送られる。同時にこれとともに、キムの成長物語が本格的にはじまるわけだが、彼にとってこうした展開は不幸以外のなにものでもなかった。彼としてはそれまでどおりアジア的混沌のなかでいつまでも遊んでいたかったはずである。だが、そうした不幸に見舞われた責任の一端は、誰の所為でもなく、彼自身にあった。というのも、「なにかおもしろいものはないかと捜しまわった」あげくみつけたのが、「緑野の赤牛」だったからである。加えて、そこで止まればまだしも、ラマの制止も聞かずに、「赤牛についてさらに詳しい

情報を得」ようとして、自ら危険へと近づいてゆく。ラマと旅に出ることになったときと同様、たしかにそれは彼の強すぎる好奇心の成せる業だった。あるいは、逃げることは大の得意だという過信の成せる業だった。彼はここで成長物語の型どおり自身の迂闊さにより痛い目に遭うことになるわけだが、状況の変化の大きさに対応することができず、とりあえずは事の成り行きに身を任せるしかなかった。

これがキムの成長物語の第一段階であるが、適切にも彼はここで自身のアイデンティティを問うことになる。

「なんてこった。あっちにゆかされこっちにゆかされ、これじゃあまるで蹴鞠じゃないか。これがおれの運命。運命には誰も逆らえない。だが、これからはミリアムさまにお祈りすることになり、なら、おれはサーヒブってことになる」。彼は悲しげに靴を見下ろした。「いや、おれはキムだ。この広い世界に生きるただのキムだ。それにしても、キムって誰なんだ」。自分が何者かなどという、これまで考えたこともないことを目眩がするまで考えた。彼は自分の運命がどうなるかも知らず、インドという荒れ狂う渦巻きに揉まれながら南にむかって進む、取るに足らないひとりの人間でしかなかった。⁹

このあと彼はさらに二度、同じ問いを自身にむかって繰り返すことになる。その時期は、一度めと同様、それぞれ彼の成長過程の節目にあたっている。二度めは、彼が学校での勉強を終えて、いよいよスパイ戦争、つまり、グレート・ゲームに加わることになる時期に相当している。

自然な反動がいきなり訪れた。

「おれはいま独りぼっちだ——まったくの独りぼっちだ」。彼は思った。「イ

ンドじゅうでおれほど孤独な人間はいない。もしも今日おれが死んだところで、誰がそれを知らせてくれるだろうか——しかも、いったい誰に。運よく生き続けたところで、おれの首には賞金がかかる。おれはお守りの息子だからな——このキムは」

(中略)

「キムって誰なんだ——キムって——キムって」

金属音の響く待合室の片隅に坐り込み、ほかの思考などまったく頭に入る余地もないほど一心不乱に考えた。膝のうえで手を組み、瞳孔は一点に収縮していた。あと少しのところで——ものの半秒もあれば——とてつもない難問が解ける気がした。それなのに、そこでいつものことながら、翼の傷ついた鳥みたいに、心が集中力の高みから急降下してしまった。彼は目を擦り、頭を振った。¹⁰

いまだ途上にあることを思えば、即座に答えが出なくて当然である。しかしながら、一度めと二度めを比べれば、成長の度合いは一目瞭然だろう。二度めには、「とてつもない難問が解ける」寸前までいっているだけでなく、一度めとは異なり、そこにはいわゆる「運命」の入り込む余地は微塵も認められない。もちろん、そうなったのは、自分がスパイになるべき人間だとすでにある程度覚悟ができていたからだろうが、そのことは、ただ心理的な意味合いに止まるものではなかった。というのも、キムにとってのアイデンティティをめぐる危機の実質とは、実際の行動を通じてのみ解消し得るような性質のものだったからである。それが証拠に、彼は物語のはじまるまえからその道と交渉を持っていた。具体的には、やり手の馬商人(じつは、「インド調査局の極秘名簿に C25・1B として登録されている」)¹¹ マハブブ・アリとの付き合いである。じっさい、物語の冒頭でラマと知り合い、一夜の宿を求めてキムが案内していったのは、マハブブのところだったし、その際極秘情報をベナレスにゆく途中のアン

バラまで運ぶ仕事をキムは引き受ける。ようするに、キムにとってスパイの仕事とは、正式にそれとなるずっとまえから着手されていたのだが、とするなら、そもそもの自覚はそこからはじめられなければならない。ところが、そうしたマハブブとの付き合いは、彼にとって、遊びの延長とまではいわないにしても、金になる臨時の仕事にありつける便利なものでしかなかったし、それゆえ、彼は頼まれた仕事をじつに楽々と愉しそうにこなしてゆくのだが、いうまでもなく、そうした仕事とこれから踏み込んでゆこうとしているグレート・ゲームとは、けっして同じではない。そのことを彼は、うえて引用した自問自答の直後に乗った汽車のなかで、重傷を負い追っ手に追われた E23 を巧みに助けた際、実際のものとして経験する。しかしながら、意識のうえでは、いまだそうした経験とマハブブを通じての請け負い仕事とはまっすぐに結びついていない。彼がなおも成長の途上にあるというのはそういう意味にほかならないが、さすがのキムも直感の次元では、そうではないかと感づいている。それが証拠に、彼は影のように目のまえに現れた諜報員のハリー・バーブーにむかって、「ぼくもグレート・ゲームに出たいんだ」、「もしもこれがグレート・ゲームなら、ぼくも手伝いたいんだ」¹² と意気込んで迫った末に、北にむかう大きな仕事を任される。そして、そのうえで彼はこう述懐する。

グレート・ゲームとはよくいったものだ。まえにクエッタで四日ばかり皿洗いをしながらある男のかみさんに仕え、男の帳簿を盗んだことがあったが、あれもグレート・ゲームのひとつだったんだ。南から——どれくらい遠くからかわからないけど——やってきたあのマラータ族の男は、命がけでグレート・ゲームに加わっていた。おれもこれから北へ北へと進んで、グレート・ゲームに加わるんだ。まったく杼みたいにインドじゅうを駆けめぐっているんだな。そして、おれがそれに加わり愉しめるのも……そこにいるお師匠さんのおかげだ。マハブブ・アリののおかげ——それとクライ

トンさんのおかげでもあるのだけど、やはり一番はお師匠さんだな。なるほどお師匠さんのいうとおり——この世は広く、素晴らしい——そして、おれはキム——キムだ——キムだ——孤独のまま——ひとりきり——そのまっただなかにいる。それはそうと、水準儀と測儀を持ったその怪しいやつらをなんとしてもみつけないで……。¹³

これはキムにとって、凶らずも、成長の頂点に達した瞬間のひとつといえよう。過去のやっつけ仕事とグレート・ゲームとの結びつきの理解、名前に違わぬグレート・ゲームの「大きさ」の認識、自分もそれに入り込んでゆくのだという積極的な意識、自分をここまでしてくれた人たちとの関係の整理、それと、そのうえでの自己認識。彼がおとなになるためにしなければならないことは、すべてここでなされている。それゆえ、「おれはキム」という、いつもの堂々めぐりのとば口に立たされながらも、その先へと雪崩落ちてゆくことはない。肯定的に自己と世界の関わりを掴んでいる。とはいっても、これらはすべて、無意識裡に、ほとんど直感的になされたものにすぎない。なにより彼とグレート・ゲームとの関係は、いまだそれを垣間見たといった程度のものでしかない。彼にとってその実相、真の姿は、依然として闇に包まれたままである。したがって、マハブブ・アリ、クライトン、ラマといった人たちとの関係も、それほど深い次元まで掘り下げて把握されているわけではなく、純朴な恩人関係の認識といった程度にとどまっている。もちろん、中間報告としては上出来であるし、それだからこそ、次の最終段階でのきつい経験も有益に生かされることになるのだが、かくて、物語はクライマックスへと、少年キムの成長段階の最終局面へと入ってゆく。それをみるまえに、「キムとは誰か、何者なのか」という問いの答えについて、あらかじめ外側から考えておくことにしよう。最後には彼自身が自分なりの答えを出すことになるだろうが、それを評価するための準備をまえもってしておこうというわけである。その際、キー・ワードと

なるのは、「ボーダーライン」という言葉である。

3. ボーダーラインの意味

少年キムが、「みんなの友だち」というあだ名で通っていることはまえにも触れたが、その意味するところは、単純に彼が誰からも好かれているということ以上のものを指している。彼がそのようにふるまえるのは、先にも述べたように、なにより彼が少年だったからであるが、それにもましていっておかなければならないのは、彼が正真正銘の白人だったという事実である。ようするに、白人なればこそ、いわゆるカーストの縛りとはいっさい関係なしに、どの現地人とも自由に自身を重ね合わせることができた（加えて、適切にも彼が「とくに貧しい白人のひとりだった」¹⁴ という事実もこの際記憶にとどめておこう）。これが「みんなの友だち」となるための基本的条件である。そうした条件を充たしたうえで彼は、言葉を含め、できるかぎり現地人同然にふるまおうとする。とするなら、欲さえかかなければ、すなわち、豊かすぎるほど豊かなインドの吐き出す余剰に与るだけで満足しているかぎりは、なんの問題もなかった。これがいわば原初のキムの姿である。

しかしながら、根本的にそうはゆかない、きわめて現実的な事情があった。ひとつには、グレート・ゲームの存在である。「みんなの友だち」であるキムは、マハブブ・アリに指摘されるまでもなく、生まれながらにしてスパイ戦争にむいていた。彼が将来有望なスパイ候補生のひとりとして選ばれたのは、けっして偶然の結果ではなかった。そのことは、うえで述べたような、「みんなの友だち」の持つ性質をみれば一目瞭然だろう。彼はなにより白人である。そのうえでなんにでも化けることができたのだから、じっさい、これ以上の適任者はいないといってよい。彼がラホールの幸せな路上生活からグレート・ゲームの実戦へと引っ張り出されたのは、蓋し当然の結果だったのである。キムの幸

せを思えば、いっそのことグレート・ゲームなどなければよいのにといいたくもなるが、厄介なことに、そうもゆかない別の事情があった。ほかでもない、グレート・ゲームが存在することとキムがインドに生まれ育ったこととのあいだには、骨がらみとでも呼べるような深い関係があったからである。本稿の冒頭でも触れたように、彼の父親は、もとマヴェリック連隊に所属していた。この連隊はフィクションではなく実在のものである。アン・パリーによれば、マヴェリック連隊は、一八七八年から八〇年にかけて戦われた第二次アフガン戦争に加わった。¹⁵ キムの父親は、その「若い軍旗護衛下士官」だったわけであるが、そうした事実とグレート・ゲームが必要とされた理由とは、当然のことながら、ぴたりと重なっている。この意味でも、キムはスパイとなるべく生まれてきたような人物だったのである。

そのように考えてくると、「みんなの友だち」というのは、ただの愛称などという軽い表面からは想像も付かないような、じつに深刻な意味を内包していることが判明する。とするなら、キムが成長するためには、そうした内実に彼がどれだけ迫ることができるかという点が重要な試金石となるはずである。とはいえ、不幸にも、キムにとってそれは容易ではなかった。理由としては、まずその若さが挙げられるだろうが、そうした自然なハンディキャップがなかったとしても、大して結果は変わらなかっただろうし、あるいは、そのように考えなければならぬところに困難さの真相があったともいえる。すなわち、彼は「みんなの友だち」という立場を、ひとつの中心と考えている。字義どおり取ればそれで少しも間違っていないし、それだからこそ、彼はあんなにも陽気で軽快にふるまうこともできたのだが、うえで述べたように、「みんなの友だち」というのは少しも中心的な立場ではない。力のうえでは、圧倒的な武力を背景にして、インドにおける白人はたしかになんらかの中心としてふるまうことができた。しかしながら、それを除けば、数のうえでも地の利の点でも、まったくの周辺者だった。だいいち、虎の子の武力的支配を強化したいがために、

そもそもグレート・ゲームの必要性が浮上したのではなかったか。加えて、う
えで留保しておいた要件のひとつ、つまり、キムが「もっとも貧しい白人のひ
とりだった」という事実がここで利いてくる。なぜなら、もしもそうならば、
周辺者のなかでもさらに辺縁にキムは位置していたことになるからである。そ
こは文字どおりのボーダーライン上にほかならなかった。その線を越えればま
さに奈落であるが、そこへと堕ちていったのが、誰だろう、キムの父親キンバ
ル・オハラだった。

のちに彼は、シンド、パンジャブ、デリーを結ぶ鉄道に職を得て、連隊は
彼をあとに残し本国へと帰っていった。フェロゼプールで妻がコレラに
罹って死に、オハラは酒に溺れるようになった。目つきの鋭い三つの幼子
を連れて、鉄道の近辺を彷徨い歩いた。慈善団体や従軍牧師らが、子ども
のためを思い彼を捕まえようとしたが、オハラは行方をくらまし、あげく
の果てには阿片病みの女と知り合った。それにより阿片の味を覚え、最後
には、インドで惨死する貧乏白人のひとりとなったのである。¹⁶

「みんなの友だち」とは、その牧歌的な響きとは裏腹に、じつは悲惨なボー
ダーライン上に立つ人の謂いだったのである。陽気な少年キムも、いずれは父
親と同じ轍を踏み、奈落へと堕ちたところで少しも不思議でなかった。「みん
なの友だち」などという甘い呼称に騙されて、自身の立つボーダーラインの意
味を見失うとしたら、そうなって当然だった。とすると、グレート・ゲームの
参加者のひとりになったことは、じつはキムにとって唯一の救いの道だったと
いえないこともない。これに関連して思い出されるのは、キムの聖ザビエル校
入学をめぐるラマが採った、なんとも不可解な行動である。キムがそこで学
ぶのに必要な年三百ルピーの支払いを彼はあっさりと引き受けるのだが、この
行為が不可解なのは、ひとつには、聖ザビエル校がどういうところなのかはも

ちろん、およそ西洋型の教育について彼はなにひとつ知らないからである。解っているのは、学問を修めることのおよそ普遍的な重要さだけである。それに、もしもキムを学校に入れると、自分の身の周りの面倒をみる弟子がいなくなってしまう。そのことは、ひいては聖なる河の探求という彼の目標にも支障をきたすことになるだろう。しかも、彼にとってこの弟子は、自身も認めるように「授かりもの」にはほかになかった。だとしたら、そうした貴重な存在を自ら手放してしまうとは、自分で自分の首を絞めるようなものではないか。そうした多くの疑問に曝された行為であるが、ひとつだけ留保を付けると、作品の冒頭で、秘宝館の館長と知的交流を交わして以来、ずっとラマは館長のことを尊敬しており、もしもキムにとって学校にゆくことがあの館長のような学識を得るためだと理解しているのだとしたら、それなりに筋は通っているということである。そこまで彼の館長に対する尊敬の念が深かったことは、彼の言葉から十分読み取ることができるからである。¹⁷ しかしながら、それを除けば、なんとも不可解な行為には違いない。ただし、ここで考えているように、グレート・ゲームがキムにとって唯一救いの道だったとする観点からすれば、ラマの行為とそうした見方とは不思議な整合性を持っているというのも事実である。

ラマについてはのちの章に譲ることにして、ここで重要なのは、「みんなの友だち」であるキムが、じつは危険なボーダーライン上に立たされたアングロ・インディアンの一ひとりだったということである。陽気さの裏には途轍もない暗闇が潜んでいたという発見である。少年キムが否応もなくこの真相にゆきあたるのはずっとあとのことだが、幸運にも、当面の彼には挫折した父親にはとても望めないしたたかさに恵まれていた。追いつめられボーダーライン上に立たされた者にとって、ふり返れば奈落が黒々と口を開けている。だが、それに怯える代わりにキムは、むしろ白人であるという出自それ自体に積極的に背をむけた。すると、それまで限界であり脅威でもあったボーダーラインが、様相を一変させて、無限の自由として機能しはじめる。そうした自由の粋を集めた結

果が、「みんなの友だち」というあだ名であり、それに基づく愉快的日々の生活だったわけだが、もちろん、これは一種のトリックである。そうには違いないが、結果だけみれば、マジックにも近いトリックである。死ぬまで白人であることに拘らざるを得なかった父親の悲惨な最期と、「みんなの友だち」となり得た少年キムのしたたかさとのあいだには、天と地ほどの開きがある。むろんキムの日々の実態とは、体のよい乞食生活に相違ないが、それでも、少なくとも赤牛の予言が的中するまでのラマとの旅が具体的に示しているように、ハックとも比べられる彼のトリックスターぶりは、彼の生活が一般の乞食のそれを、その実質においてはるかに凌駕していたことを如実に教えてくれる。白人であることに背をむけた末の乞食生活は、魔法のように、ボーダーラインという厄介な限界を尽きることのない自由の源泉へと変貌させたのである。

もちろん、この自由にも危険は伴う。キムの場合は、有望なスパイ候補生として引き抜かれるという危険だったわけだが、すべてはボーダーラインとの関係をどのように自ら措定するか、それひとつにかかっている。キムも彼の父親も、依って立つ基点は同じであるが、キムの父親にスパイの仕事が務まるとは夢にも思えない。しかしながら、キムであれ誰であれ、「みんなの友だち」であることとスパイであることとは、事の本質からして両立不能である。学校に閉じ込められたキムの味わう苦悩とは、そこでの規律や息苦しさ全般の所為というよりは、この両立不可能なことを身をもって実感させられたことに由来する。休暇中ぐらいいは自由に昔の乞食生活に戻らせてくれと、キムはクライトン大佐の意向に逆らってまで想いを実行に移すが、これにしても、彼の表面的な意識のうえはいざ知らず、もっと深い次元では、昔の生活に対する素朴なノスタルジーなどとは無縁だったはずである。でなければ、あれほど彼が切実になり、さして必要もないのに、じつに手の込んだ変装までするわけがない。彼にすれば、ジレンマを解消するとまではいわないにしても、それに押しつぶされないための、一時の解放感を得たいがための、必死の抵抗だったのである。本

文にはこう書いてある。

……彼はその女に四アンナ支払い、どこからみても低級カーストのヒンドゥー少年になりきって、階段を駆け下りていった。次に食堂を訪ね、脂ののったご馳走をたらふく食べた。

ラックナウの駅のプラットホームで、汗疹だらけのド・カストロが二等客車に乗り込むのをみかけたが、キムは三等を好み、また、心底そこになじんでいた。ほかの乗客には、自分は曲芸師の弟子で、熱を出して寝込んでいたため師匠に置いてゆかれたが、アンバラで落ち合うことになっていると説明した。客車の人間が替わるたびに、空想の赴くまま話を変奏し脚色したが、その語り口は、長いあいだ土地の言葉を口にしなかったぶんだけ饒舌だった。この夜のキムほど幸せな人間はインドじゅうどこを探してもみつからなかっただろう。アンバラで列車を降りて東に進路を採り、水田をばしゃばしゃ歩いて、例の老兵の住む村にむかった。¹⁸

語り手のいうとおり、これがなんとも幸せな光景とみえるなら、それを背後から成り立たせている不断に圧迫されたキムの心中を思うべきである。

とするなら、さしずめキムに解決を迫るのは、グレート・ゲームなどといった大きすぎる枠組みの解釈などではなく、直接身を持って実感できるそうした違和感のほうだったはずである。これには、主観的なぶんだけ独特の困難さが伴うが、適切にもキムはこれを実地の行動を通して乗り越えようとする。物語は先に触れた北にむかうハリー・バーブーとのやりとりの場面となるからである。彼が北にゆかせてくれとハリーに対して意気込むのも無理なかった。それに当面の問題解決のすべてがかかっているとしたら、それで当然である。先の引用で、「おれはキムだ」と自己確認したあと、「それはそうと、水準儀と測儀を持ったその怪しいやつらをなんとしてもみつけないと」と、きわめて冷静

に現実に戻るのも、いまではなるほどと肯ける。少なくとも直観の次元では、そうして与えられた仕事の遂行を通じてのみ、求められる問題解決を果たすこともできると理解していた。もちろんこの種の仕事には死が伴う。文字どおりの流血が伴うが、そうしたことは、少なくとも表立った形では、不思議にもこれまで作中にはいっさいなかったことである。これに関してフィリップ・メイソンは、この作品は「本質的にめでたい作品である。憎しみとも復讐ともまったく無縁であり、不快な登場人物さえひとりも出てこない」といっている。¹⁹ このメイソンの評言は正しいと思うが、キムの内的成長という点からすれば、ここにそうした「めでたさ」は破られることになる。このことは、たとえメイソンのいうとおりキムが対峙する「ロシア人スパイが人間になっていない」²⁰ としてもそうである。繰り返せば、キムにとっての問題とは、どんな外側のリアリティでもなく、あくまでも彼自身の内側のそれだったからである。

4. 曖昧な結末

北での仕事は、これ以上望めないほどの上首尾に終わる。ロシアのスパイから奪い取るべきものはすべて手に入れることに成功する。ただし、その際ある出来事が勃発する。それは皮肉にも、キムとハリーがロシア人を出し抜くきっかけとなったものだが、北にむかう山登りに同行していたラマと、曼荼羅絵を欲しがるロシア人とのあいだにいさかいが生じ、それがもとでラマがロシア人に顔をまともに殴られるという事件が起きる。その混乱のなか、キムとハリーは求めるものの奪取に成功するのだが、心配なのはラマである。老体に強烈な一発を食らったこともさることながら、不意を突かれて危うく激情に身を任せそうになった自身の修行不足を嘆くあまり、病気のようにになってしまうからである。ラマはキムにむかっていう。

わしの心は解き放たれていなかったのだ。スピティの男たちが殺しにゆくのを許したいという邪欲がすぐ沸き起こったのだからな。その邪欲との戦いは、千の拳よりもわしの魂を引き裂き捻り回したのだ。仏の至福を讃える経文を繰り返し唱えて、ようやく平安を得られる始末だった。だが、あの瞬間の不注意によってわしのなかに生まれた魔物は、きっとその悪をまっとうするだろう。輪廻は正しくめぐり、毫も逸れることはないのだからな。²¹

「因果を考えてみなければならぬ」とラマはいい、そのまま深い瞑想に入る。その結果明らかになったのは、まだ壮年時代のある出来事との結びつきだった。

輪廻は正しい。あの邪教徒の拳が命中したのはこの古傷じゃった。それゆえ、わしの魂は揺すぶられ闇に閉ざされた。魂の舟は波浪に翻弄された。シャグレムにきて、ようやくその因果に思い到り、悪の草の根の伸びの速やかさを追うこともできた。一晩じゅう必死になってな。²²

ラマは「啓示を受けた」という。「聖なる河の探求を忘れ」、「生とその邪欲に悦びを見出し」、「そうして悪が悪を呼び、ついに杯が満ちてしまったのだ」と。「『道にもどれ』とあの拳はいうておったのだ。『高地はおまえの地ではない。生の悦びに縛られながら解脱を求めることはできない』とな」。²³ いまだ体力は完全には戻っていないが、早急に山を下りるようラマは強く主張する。

これだけみれば、山登りから糧を得たのは、若いキムではなくもっぱら年老いたラマのほうだったということになるが、もちろん、それでは物語にならない。キムにとっての山登りの成果は、それより少し遅れて明らかになる。

ラマを連れたキムは、非常な骨折りをしながら山を下りてゆく。「顔はげっ

そりと痩せ細り」、やがては魂も「疲れきって」ゆく。

もはや一日に二三マイル以上進むことなく、キムの肩はその重みに耐えた——老人の身体、鍵のかかった本を入れた重い食料袋、胸もとの書類、調度品。夜明けに托鉢をし、ラマの瞑想のために毛布を敷き、日中の暑い時間にはラマの疲れた頭を膝に載せ、手首が痛くなるまで蠅を追い、夕方にはふたたび托鉢をして、ラマの足をさする。²⁴

「彼は疲れ果て、頭が熱く、腹からせりあがるような咳に悩まされた。」だが、キムが心配するのは師匠のことばかりである。

「おれはお師匠さんを連れまわしすぎました。おいしいものを持ってきてあげられないこともあったし、暑さのことも考えなかった。道で人と話し込み、ほったらかしにもしました……おれは……おれは……ああ。でも、おれはお師匠さんが好きなんだ……だが、もう遅すぎる……子どもだったんだ……ああ、どうしておれはあのときおとなじゃなかったんだろう……」。彼の齢には過酷すぎる緊張と疲労と荷の重さに耐えかねて、キムは崩れ落ち、ラマの足もとで泣きじゃくった。²⁵

ふらふらになって山を下りたキムは、死んだように眠り込む。手厚い看護を受けながら、体力を取り戻し、一刻も早く手放したいと思っていた戦利品を漸うハリーの手に託す。意義深いことにも、その直後に、多くの批評家が引用する次の有名な場面が続くことになる。

はじめのうち彼の脚は古い羅字のように曲がり、洪水よろしく押し寄せる陽の光に照らされた空気のまぶしさに目が眩んだ。白壁のそばにしゃがみ

込んだ彼の頭のなかを、長かった駕籠での旅の出来事や、ラマの衰弱のさまが走馬灯のように駆けめぐった。しゃべりたい欲求が去ったいま、病人さながら貯めこんでいた自己憐憫の想いが湧きだしてきた。拍車をあてられた未熟な馬がそれから逃れようとして斜行するように、萎えた頭はすべての外界からじりじりと遠のいていった。戦利品を入れた籠がなくなった——手を放れた——彼の所有物でなくなった、そのことだけでも十分すぎるほどだった。彼はラマのことを考えてみようとした——なぜ小川になどはまってしまったのだろうか——しかし、前庭の門からみえる広い世界が思考の連鎖を押し流してしまった。彼は木々や広い畑をみた。穀物に紛れている草葺の小屋をみた——奇妙にも、物の大きさも形も使用目的も掴めなかった——さらに半時間費やして見据えていた。言葉ではうまく言い表せないが、その間ずっと、自分の魂が周囲の世界と噛み合っていないように感じていた——機械のどこにも繋がっていないはめば歯車、隅に置かれた安物のベヒーア砂糖きび絞り機の遊び車になった気分だった。そよ風が吹き寄せ、鸚鵡が金切り声を上げ、家の裏の混雑した騒音——口論、命令、叱りつける声——が聞こえない耳を打った。

「おれはキム。おれはキム。だが、キムって何者なんだ。」彼の魂はなんどもそう繰り返した。²⁶

このシーンが有名なのは、「キムって何者なんだ」と自問する、三度目の、そして最後の問いかけが行われるからである。これが最後ということはつまり、キムがなんらかの結論に達することを、通常は意味する。うえの場面はさらにこう続いている。

彼は泣きたいわけではなかった——これほど泣きたい気分から遠いこともなかった——それなのに、突然わけもなく涙が湧きだし鼻を伝い落ちた。

すると、聞こえんばかりの音を立てて、彼の存在の菌車があらためて外の世界と噛み合った。ほんの少しまえまでは意味もなく眼球を去来していたものが正しい形にすっと収まった。道は歩くためのもの、家は住むためのもの、家畜は駆るためのもの、畑は耕すためのもの、そして、男と女は話しかけるためのものになった。すべてが現実のものであり、真実だった——しっかりと地に根を下ろし——完全に理解可能であり——彼と同じ土からできていて、それ以上でもそれ以下でもなかった。耳に蚤が飛び込んだ犬のように身震いすると、彼は門の外へとぶらぶらと出て行った。²⁷

引用がくどくなるが、さらにこのシーンには続きがある。

半マイルほど先の小山のうえに空の牛車があった。背後には若いベンガルボダイジュの木が立っている——新しく耕した畑の見張り所のようなものだったが、それに近づくにつれて、柔らかな風を浴びた彼の臉は、しだいに重くなっていった。地面は質のよいきれいな土だった——生えだしてすぐ枯れかかってしまう草に覆われた地面でなく、あらゆる生命の種を宿した希望の土だった。彼はそれを足の指のあいだで感じ、両方の掌で叩き、至福のため息を洩らしながら、身体の節をひとつひとつ解きほぐすように、木に繋がれた牛車の陰で大の字になった。母なる大地は奥方のように優しく、彼の身体に息を吹き込んだ。あまりにも長いあいだ、その健康な息吹から切り離され寝台に横になっていた所為で失ってしまっていた平衡を取り戻させてくれた。彼の頭は力なくその胸に抱かれ、開いた手はその強さのまえに屈した。豊かに根を生やした頭上の木、その傍らの生命のない牛車ですら、彼自身が知らずに求めているものを知っていた。何時間も横になって、彼はぐっすりと眠った。²⁸

キムが眠っているあいだに、ラマとマハブブ・アリが長い会話を交わす。ラマは、聖なる河を見つけ（そのようすは読者には間接的に知らされるだけである）、智恵を得たいまとなつては、「巡礼の旅も終わりだ」と宣言する。マハブブは、次の仕事のためキムを連れだしにきたのだが、半ばラマの狂人ぶりに呆れ、半ばその人の良さを信頼して、その場をあとにする。やがてキムが長い眠りから醒め、結跏趺坐したラマと言葉を交わす。ラマは聖なる河発見の経緯をキムに話す。たしかに解脱の手前まで到達しながらも、「おまえをあらゆる罪から自由にするため」に戻ってきた経緯を説いて聞かせる。

物語はこれで終わりだが、こうした結末の有り様には、多くの異論が出されている。ラマとマハブブ・アリがそれぞれに代表する生き方に引き裂かれたキムが、最後にはなんらかの総合された境地を得るとするシャハネのような、むしろ楽観的な読み方から、どちらかを選ぶべきはずなのにそれが明確にされていないと曖昧さを糾弾する読み方まで、じつにさまざまである。サンディソンは、二者択一を迫るような読み方それ自体の間違いを指摘し、むしろ曖昧のまま受け取ることには積極的な意義を見出そうとしている。アンガス・ウィルソンは、少なくとも部分的には答えが出されていると考えているようである。また、アーヴィング・ハウは、『ハックルベリー・フィン』とのあいだに鋭い対比を加えながら、好意的にキムの「変身」を認めようとしている。²⁹ そうしたなかにあって、アン・パリーの見方はより明確である。³⁰ 彼女によれば、「キムとは何者か」という問いに答えがないことこそ、彼が成長した証なのだという。なぜなら、キムが学んだのは、「スパイであるということは何者でもないということであり、それが神出鬼没であるのは……アイデンティティの流動性に依る」のだからと。「故意に自己規定を拒み、変容する力を保ち続けること」、グレート・ゲームにより求められているのはそれだということを、キムは学び取ったと彼女はいう。全般的な彼女の議論は緻密であり（とりわけハリー・バーブーをめぐる解釈は秀逸である）、キムがなによりスパイとして生きてゆくだ

ろうという見通しそれ自体についても、ラマの超自然的な解脱のあとを追いかけるとするよりは、はるかに現実味に富んでいる。しかしながら、たとえそうだとしても、どのようにしてキムにそれが可能だったのだろうか。「みんなの友だち」だったキムが、それとは正反対の「何者でもない」人間にどうして成り替わることができたのか。知りたいのはそれである。

いずれにしろ、たしかにいえることはこうである。北でのグレート・ゲームの実戦を通じ、キムはなにかを学び取ったということ。そのことだけは、キムをめぐる先の三つの長い引用からも明白である。そこにあるのは、アン・パリーのように理詰めで話をする評者にはさして役に立たない描写にすぎないが、なにより『キム』を芸術作品と見做す立場からすれば、文句なしに物語のクライマックスとするにふさわしいシーンといえる。それが証拠に、それをほかより際立たせているのはどんな内容でもない。物語のその一角を特別なものにみせているのは、文章そのものの持つ美しさなのである。それゆえ、批評家の注目を多く集めることになるし、自然と引用も長くなるのだが、そうした美しさこそは、芸術作品における重要な指標を構成する。もっといえば、それは、結果をポジティブに考えてよいとするテキストからのサインである。本来的にはそうした積極性に限界はないから、読者は結末をどのように措定してもかまわないわけだが、そこまで極端なことをいわなくとも、作品を充実しながら読み終えるのに十分な自由をそれは読者に与えてくれる。

なによりキムは、ボーダーライン的な記号を熟知している。街道、市場、カースト、言語、衣服、化粧。どれについても一級品の知識を持っている。その彼が北にむかい、帝国のまさしくボーダーラインで戦ったとしたら、少なくとも「みんなの友だち」であることとグレート・ゲームに参加し続けることの矛盾を身をもって実感したに違いない。スパイであり続ける以上、それがせいぜい便利な仮面のひとつにしかなり得ないということを知っただろう。彼が山下りの際に味わった過酷さは、そのままグレート・ゲームのそれにほかならず、か

つての市場での幸せな生活からはいかにも遠いものであることを理解しただろうし、同時に、グレート・ゲームがけっして中心的なものではないという真相も掴んだはずである。そうしたことはすべて、若いキムの精神に否定的な働きをして当然であるから、山下りののち彼が疲弊し倒れてしまう理由の半分は、明らかに精神的なものだったとみてよいだろう。しかしながら、彼はそこから回復する。先の引用にあるように、「平衡」を取り戻すことによって回復する。ボーダーラインに立つ者にとって、平衡を維持することがいかに困難であるか、想像するに難くない。しかも、キムにすれば、そこはほかのスパイたちとは違って、好んで飛び込んだ場所ではなかった。運命により割り当てられたもともとの居場所にほかならなかった。したがって、そのぶん平衡を保つ作業はより微妙なものとなる。自身のアイデンティティを問う作業を、正しくも彼はそこからはじめたのだが、彼に課せられたのは、従来の平衡を騙しだまし転用することではなく、自身が身を委ねることのできる新たな平衡を発見することにあった。彼は成長の第二段階において、深い孤独感に苛まれるが、それこそは、求めるものをボーダーライン上に発見するための第一歩だったといえよう。もはや自分が「みんなの友だち」であることをやめ、誰の友だちでもなくなったことを、彼が掴みはじめた証拠として読めるからである。同様の証拠は、アン・パリーのいうような、キムのハリーに対する認識の変化にも読み取ることができる。サービズであるキムにとってあくまでもハリーはハリーであり、自分より下の、ときには軽蔑すべき存在でしかなかったが、それが北での実戦を通じ、一目置かれる厚みを持った人間として認識されるようになる。³¹

といって、もちろん、ハリーが成長したのでもなんでもなく、キムの立つ位置がそれまでとは決定的に変化したからにはほかならない。彼が新しい平衡を取りはじめた証拠とみてよいだろう。しかも、ハリーがバーブーとして、インドとヨーロッパとの境界線上にいることを考え合わせると、このキムの認識上の変化は、その意味を倍化させるようにもみえてくる。

ここまでくれば、「みんなの友だち」から「何者でもない者」までの距離は、ほんの一步である。しかし、『キム』のテキストは、その一步を直接に踏み越えることができなかった。アン・パリー流の見方をすれば、キムに決定的に欠けているのは、「何者でもない者」のイデオロギーである。それなしには、誰もスパイであることの孤独や過酷さに耐えることはできない。しかしながら、キムの成長物語は、いっぽうにおいては、解脱を求めるラマとの旅の物語でもある。どんなイデオロギーであれ、それといわゆる解脱との距離がいかに遠いものであるか、いまさら多言を要さないだろう。結果として、作者としては、美の力に訴えるしかなかった。いわゆるオープン・エンディングのまま物語を終えるしかなかったのであるが、キムがボーダーラインというものに、おそらくは作者が考えている以上に誘惑を見出していたのだとしたらどうだろうか。ここで物語のなかのシーンをいくつかあらためて思い出してみよう。物語の冒頭で、キムはラマと秘宝館の館長との会話を盗み聞きし、それがラマと旅をするきっかけとなったこと。あるいは、マハブブ・アリに仕事を頼まれ、密書をクライトン大佐のもとに届けた際、それだけでは満足できず、わざわざ部屋のなかの秘密の会話をここでも盗み聞きすること。あるいは、「緑野の赤牛」をみつけた際、彼にはめずらしく不用意に深入りしすぎてしまったこと。いまだスパイという公的次元で動いていないことを考えれば、これらはすべて好奇心の成せる業だったといえようが、見方を変えれば、その都度、秘密や謎という一種のボーダーラインに誘惑されていたとも考えられる。じっさい、彼に、スパイのスパイたる所以であるイデオロギーの持ち合わせがないとしたら、これを除けばそれに代わるものはほかにはなにもなかったのだろうし、これに依存しているかぎり、少なくとも当面のあいだは、「何者でもない者」としてボーダーライン上において平衡を保ち得る。なぜなら、そのように誘惑され続けるのに必要なエネルギーの供給源を彼は確固として持っていたからである。その供給源とは、ほかでもない、自身の父親をめぐる暗い記憶である。自分とは何

者であるかという問いには容易に答えられないキムであるが、キムをキムとしたのは誰なのかという問いには、即座に答えることができた。死んだ母親の記憶はなきに等しいものだったが、落ちぶれた父親とは、ともに「鉄道の近辺を彷徨い歩いた」。酒に溺れ阿片に身を持ち崩してゆくその姿を目撃した。彼が父親の下した予言を覚えているのは、世話になっている女から口移しに聞かされたという理由だけではないだろう。そうした暗い記憶が、逆説的に誘惑として働く機微については、いまさらフロイトに頼るまでもないが、父親を悲惨な死へと追いやったボーダーラインの不可思議な脅威、その魔力にキムは根本的に捕らえられていたのである。もしそうならば、そこから供給されるエネルギーをもとにして、キムは求められる平衡を、その都度更新してゆくことができるだろう。しかも、この種のエネルギーの供給源が、中途半端なイデオロギーなどよりはるかに信頼性に富んでいることは、これまた多言を要さない実証済みの真実でもあるのだから。

5. おわりに

最後に、ラマとの関係について少しだけ述べておこう。キムがラマの旅についてゆくことにした動機については、先に答えを留保したままにしておいたが、ここまでくれば、より明確にそれを提示することができるだろう。ほかでもない、ラマとは、キムにとってひとつのボーダーラインだったのだと。「宝物」とまでいいきっていることについても、そうしたものとしてのラマに強く誘惑されたからであると考えれば、うへの考察とも自然な整合性を成すだろう。ラマのめざす解脱についても、少なくとも常識的に考えるなら、これまた目にみえない次元でボーダーラインを構成するもののひとつといえるし、先に引用した、山下りの際にキムが衰弱したラマに対してみせる過剰な反省の由って来るところも、同様に考えてよいだろう。ラマは解脱の目前まで到りながら、

わざわざキムのために現実世界へと戻ってくるが、それについても、積極的にキムに対して貴重な目にみえない次元のボーダーラインを残すためだったと取れないこともない。そして、そこまでするからには、ラマがしきりにキムに対して呼びかけるように、たしかにキムはラマにとって「魂の息子」なのである。じっさい、ふたりのあいだの愛情だけは、作品中徹底している点だといつてよい。ラマがわけも解らずキムの学費を負担するのも、蓋し当然だったのである。あるいは、こうした側面においてこそ、『キム』は、『ドン・キホーテ』や『ハックルベリー・フィン』を越えていると見做してよいのかもしれない。また、このことは、先に引用した、とりわけキムが眠りに落ちる直前の描写の美しさとも無縁ではないだろう。なぜなら、母なる大地に抱かれ深い眠りに落ち、それにより蘇生するキムの姿こそ、じつは作者の考える真の解脱を指すもののよう思えてならないからである。そうしたキムのふるまいのうちにも、ボーダーラインの誘惑が働いていなかったと誰に断言できようか。

註

1. Rudyard Kipling, *Kim* (New York: Penguin Books, 1987), p.49.
2. *Kim*, p.51.
3. Ibid.
4. この種の研究は多数なされていて枚挙に暇がないが、参考に次の三つを挙げておく。
Edward Said, *Culture and Imperialism* (New York: Knopf, 1993)
Don Randall, *Kipling's Imperial Boy: Adolescence and Cultural Hybridity* (New York: Palgrave, 2000)
David Gilmour, *The Long Recessional: The Imperial Life of Rudyard Kipling* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2002)
5. *Kim*, p.60.
6. *Kim*, p.64.
7. Ibid.
8. Harold Bloom, 'Introduction' to *Rudyard Kipling's Kim: Modern Critical Interpretations*

(New York: Chelsea House, 1987), pp.3-8.

9. *Kim*, p.166.
10. *Kim*, pp.233-234.
11. *Kim*, p.69.
12. *Kim*, p.269.
13. *Kim*, p.273.
14. *Kim*, p.49.
15. Ann Parry, 'Recovering the Connection Between Kim and Contemporary History,' in *Kim*, ed. Zohreh T. Sullivan (New York: Norton Critical Edition, 2002), p.310.
16. *Kim*, pp.49-50.
17. *Kim*, p.170.
18. *Kim*, p.175.
19. Philip Mason, 'Kim: "Life as He Would Have It",' in *Rudyard Kipling's Kim*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1987), p.28.
20. Ibid.
21. *Kim*, p.301.
22. *Kim*, p.309.
23. *Kim*, pp.309-310.
24. *Kim*, p.319.
25. *Kim*, p.320.
26. *Kim*, p.331.
27. Ibid.
28. *Kim*, p.332.
29. Vansant A. Shahane, *Rudyard Kipling: Activist and Artist* (Carbondale: Southern Illinois U.P., 1973)
Alan Sandison, 'Introduction' to *Kim* (London: Oxford World's Classics, 1987)
Angus Wilson, 'Kipling's Kim,' in *Rudyard Kipling's Kim*, pp.43-55.
Irving Howe, 'The Pleasures of Kim,' in *Rudyard Kipling's Kim*, pp.31-41.
30. Ann Parry, p.320.
31. Ibid., pp.318-320.

*なお、本文を引用する際には、斎藤兆史訳（『少年キム』晶文社刊、1997）を参考にさせていただきました。